宋代史料彙編

三

義太夫獨習新書貳の巻

竹本此太夫の教示

語出

聽者の耳を澄すやうこて枕の間を小音に語り出す風もあれごも　あながち好むべきにも非ず啻々譯の聞ゆる樣　しこやかに語るが宜し併し塲合に依り文句に依り語り樣の心得あるべし

時代物

地合も詞も位を付て緩然こ語るがよろし　されご餘り延び過たるは聞にくし　怠屈せぬ樣心をつけ程克く語るべし

世語

常に物云ふ心持にて詞遣ひさら〳〵こ　ねばらぬ樣に云ふがよろし　地合の工合も同じ心得なるべし

物語

概ね入込たる事情を噺するものなれば　むちやつかず　きつばりこ譯の

最も良く判る様に行義に語るべし

修羅事 急ては得て絶句するものなり　只口早に語る計りこ心得て能く〳〵氣を沈め　わこしつけてやるがよろし

位有人 地合詞こも上品に武骨ならぬ様　安らかに語るべし　同じ雲上の人にても鎌足の大臣　安部の行主杯官位の高下に依り夫〳〵の心得持あるべし

大　將 こせつかず大様に岐然息正しく語るべし　之れも亦其大將に因りて豪勇智略　官位の趣き心得あるべし

うれひ 地合も詞も文句の意味を詳らかに辨まへて憂も　つらさも　自身の事こ思ひこり語る我れさへ自然こ涕のこぼるゝ程に身を入れて語るべし　取り別け詞に愁がきかねばならず　泣落し杯も聲を轉ろばす斗りにて眞實ならねば如何に塲當りがしても聽者に感動を與ふる事能はず　能く〳〵工夫あるべし

手　負 音聲亂れ　調子揃はず引息甲斐なく　つく息斗りの様に語るが大体なれこも其れも餘りハア〳〵こ騒がしく歌舞技めきては下作にて聞にくし

ちやり 時の流行こて珍らしき事を入れて人の氣を採り笑すも善けれこ餘り重ね〳〵なるは悪ろし飽けば珍味も味無こかや　只詞遣ひ拍子能く輕う語るが第一こ心得べし

酒　醉 あたまがちにしり口のもつれる様にこ巻舌にて云ふが善けれこ之れも餘りしつこくて文句の譯が聞にぬ様では悪ろし只聲づかひの大小上下に心をつけて足元のよろめく様に語るべし

阿房　何となく取り締らず調子高にて素直なるがよし　飄輕過れば決句あごなうは聞へぬものなり

ごもり　云出しが出兼ね　云ひ始めると口早に云ふものなり　但しぜゞりこ紛れ易きものなれば其分ちよく心得べし

爺媼　がんぜうなるもかよはきもすべて老人のたもむきことばづかひに心をつくべしされば𪜈て無性に歯抜の眞似をするは悪ろし亦老人の氣性及び年齢にも心掛べし

女房　年齢に因り夫〳〵の別ちあれど女の情を能く心得へ武家はきつぱりこし町家もいやみなきやう只やさかたに語るがよし

遊女　凡て勤めの者は地の女と違ひチト賤しきもよけれど聞苦しきは悪ろし只洗ひ鯛とも云ふべく何處やらあかのぬけたる樣すつぱり語るがよし猶ほ太夫藝妓等の分ち能く工夫あるべし

娘　貴賤上下の品は異れど何れしほらしく　たぼこ　なるをよしと心掛べし

子供　あいらしく　かんこへにて素直に語るべし　されど餘り小兒の聲音を出すは初心らしくて聞苦し

敵役　聲高でいばりちらす斗では却て押しきかぬものなり　詞遣ひ何か何處やらに底意地悪く聞こゆる樣に語るべし

詰合　男女の詰合は自然と聲の甲乙ありて判り安けれども男同士のせりふは能く心得ねば何ちらが云ふやら判り難き者なり　されば𪜈て切り替つたる聲を使ふも面白からず　故に只聲のつかひ方を工夫して人には一癖こや

ら人々の風を拵へて語る様工夫あるべきなり

掛合　地合詞ともに受取渡合の透かぬ様かぶせ掛て語るがよろし　併しものによりて様々なれば夫々程克く心掛べし

艶事　美くしき花に水そゝぎたる様隨分奇麗に語り言葉もはゆげに云ふべきなり　蓋し高貴の前にて云ひ兼ぬる様思わるゝも下品に語らぬ以上は少しも聞苦しからず

道行　之れは一際花やかに百花爛漫たる様に語るべしてわきの心得は次の景事にさしてかはる事なし

景事　隨分うんしやうなるがよし　節の籠りたる者なれば音の甲乙　産字の運びに心を附ねば連れて語る時抔してわきの聲　入交りて文句の綾　判り難きものなり　又わきはしての聲にさはらぬ様に助くるが詮なればしての云ひ出すより一字づゝあとからつけ　節尻の引ばりも良き程に殘りて合の透かざる様に心得て語るべし

詞より地にかゝる四地の事

元來地は水の如し　詞は流の如し　節は漣の如しと云へり　故に地の水いつも同じ地合にては雨垂拍子斗りにて淨瑠理にはならず　茲に於て詞より地にかゝるに四種の地合あり　左の如し

地いろ　**地はる**　**地う**　**地中**

淨瑠理節章の辨

抑も節章は陰陽五行を表して二十四節七十二候に象り　節に納る處は土用　節がはり

にして　春は萬物開き初る生々の心ありて皆人のよろこび勇む　其中に神祇釋教戀無常を配して文句の肌に從ふなり　夏は火にてのぼる氣ある節なれば万事強くさかんなる心にして哀愁を離れたる意なり　秋は金にて殺伐の氣なれども陰に赴く体なれば如何にもしめやかに憂愁悲傷の中に武道も相交る心なり　冬は水にて物事しづかにそうぐ〳〵しからぬを要とす而して其中に陽氣の萌時なれば其心持にて差引の考へ有べき事なり

されば淨瑠理に四音あり又三重には七曜星を象り七ケ品あり送りに一週日卽ち七ケ傳あるなり　節はふしにて本一二十四ふしあり障りで四十八節となる其餘は表具　文彌半太夫等新規に出來たる數多ありと雖も皆法に則り助けの障こするものなり故に他に法外の節を用ゆるものにあらず　人によりては新奇なる節を附んと或は六ケ敷ゆりまわし又は聲を捻りて吟に振まわす等色々に語り方を爲す者ありと雖も、節に名なくては義太夫節にあらず　譬へ節の重る事あるとも文句の治定に寄り赦すべき廉あるなり豈に新奇なる節付を爲す要あらんや

夫れ文句は世界なり　詞は水なり　節は風雨の如し天氣次第によりては欝陶敷もあるべし淨瑠理亦た然り　塲合に依りては　面白からぬ所もあるべし　故に引き延す節は極めて引き延し　延さゞる處は極めて延さず長短法に則り　當る處　穩かに當て込み面白からぬ處を挫まず始終節のふらつかぬ樣に治定するこそ眞の義太夫節こするなれ

同章附之事

トアルハ上ル　トアルハ下ル　トハ下テモツ　トハユル　ユリモドシ

ヲ チス　ｉ ハシル　レ ハネル　〜 モツ　ｍ モツテユル

以上は謡の通にして彼の五行浄瑠理本に記しあるが如し故に本書には省略す

凡べて本書には三絃符号を主として記載する者なれば浄瑠理附号は左の附号を主として記入しあるなれば茲に顯し置くべし

フシ 節　入 イル　ｍ ナキ　ゐ 地　と イロ　ウ

ころ ハル　中　下　上　クル　ギン

汨 キメ　ヲス　ヲン　ノル

一 フシ は節の字にて四季の土用の如し、依てフシの跡は改る心なれば地、と、中、地、イロ、ハル、地、と、ウ、抔付る習ひなり　其他は押して知るべし

蓋しキメ、ヲス、は詞の中にある事にて　詞の言切れに　きめるヲを　キメ　といひ又今一層強くキメルヲを　ヲス　と謂ふなり

ヲン は浄瑠理の音聲の上下を云ふ事にて或は三味線は三上の音即ち「〈」なる時と雖も音聲は吟より出でゝ三上に直す場合あり　然る時に左の符号をなす

（ヲンつ）

亦た三絃なくして浄瑠理丈の場合に用ゆる事あり即ち日蓮記三段目の皷歌を以て假りに符号を顯さん

ヲン 燈火 ㇔ 眠る。 ㇔ そき間より。 ふ ㇔ きくる

風ニ乃（ねンエ）

復た三紘は メリヤス にて淨瑠理の語り方を三紘符号にて書きたるあり之は沼津の段にあればしたしく就て學ぶべし

而して左の如き同じ字なれども大に情を異にし僅かの言ひ廻にて聽者に感動を與ふるあり 大略を左に示さん

ハア 驚ク時　ハア 悲ム時　ハア 勿躰ナキ時　ヱ 怒ル時（之レ重ク押スナリ）

ヱ 嬉キ時（之レ輕ク言フナリ）　ヱ 我身ヲ悔ム時　ナア 遠ヲ呼ブ時

ナア 近ヲ呼ブ時　イヤ 物イフ初ニ用ユル時　イヤ 否ト言フ時　ムウ 思案スル時

ムウ 點頭時　ムウ 其他　ア ア ヲ 等種々あれば前後の文句に鑑み言ひ方を工夫すべし

三重七ケ品之辨

大三重　例令五人兄弟初段中入

たいこのこゑやつゝみのねちゝの。

ユフルゝゝ〳〵合カン〳〵ユフルゝゝ

秋こそ

右は眞の三重共いふ是は初段の中入より外にはなき事なり其外は行草の三重なり

三重　是は何事もなき常の三重なり

猛三重　例令義經千本櫻序の中

あみをのがきて

愁三重　例令芦屋道滿四ノ口

尋來ませ和泉成信田の森へと

中愁三重　例令千本櫻二ノ口

涙と共に道をぢをたとり。

しころ三重　例令忠臣藏に

あかりをてらを障子の內かけを

かくをや

送に七ケ傳の辨

常のヲクリ　小チクリ　色チクリ

右は三絃附号に悉しくせり依て茲に略す

ウヲクリ　小チクリに類似せし者にて例令忠臣藏八段目道行の內に

娘小浪がいひふづけたのみも

ギンヲクリ　例令姫小松二ノ中に

早うゝゝゐぜひふくも一間にゝ

是はユリあるもあり又なきもあり

アタリヲクリ　例令兒源氏道中軍記にあり

其俤は我ゐがらわしとは

歌ヲクリ　例令せみ丸の道行の中に

きけばやァ、爰よあはだ口

又甲賀三郎三段目に

つぼ祢〳〵よ火をとぼを

右は後の詞小歌より移る故前よりヲクル節に心ゐあり

ツキヲクリ　例令びやうぶ八景の内に

濱名のをしいあとたえてさよの

ハヅミ三種之辨

大友眞鳥に

ぬきみだる柳の枝の

修羅の内に

あたりをよらんで立たるい。

風俗の内に

心地よかりしありさまあり

暇申て今むらさきは。

本國さして歸りけれ、

五節段切之辨

神祇釋教戀無常哀傷祝言等杯に付責詰勇杯の替目有るをいふ　例令神祇は天智天皇の三段目三人の爺の段切高砂の謡の如く是れ双調に語るべし祝言に是も同じ音聲引き切れる迄寝入らぬ様に氣を附け語るべし

釋教は五戒竟三段目の段切平調よりこりて次第にあげ詰を語るべし、無常は黄鐘などて皆な夫々理の上に呂律の配當有るべけれども素人社會に於いては指したる要なければ大様右の心得を持つて只ふしの語様を考へ詞の判るよふにしてもたれざるを良しとするなり

義太夫獨習新書貳の巻說明終

繪本太功記

作者　近松やなぎ

近松柳は初め並木柳と稱す、後柳太郎と改む、寛政年間、若竹笛躬等と供に淨瑠理を作れり、豊竹、東竹田両座かけもちの作者にして、さして番數は作らざれども、繪本太功記は、實に其傑作にして今に至るまで世に持囃すところなり

太功記

本能寺の段

謡 しかのねむしのねもかれ〳〵ちぎり。あらよしふや。かたみのあふぎより〳〵。ふほうらおもて、あるものは　ひとこゝろふりけるぞや。あふぎとはそらごとや　あはでぞこひはそふものを〳〵。囃 つぼねがいつき

よく、できた〳〵。せがれはるたゞがみや
うだい。まごどのへごちそうよ。なんとお
もしろい。サ、つげ。〳〵とおほさかづき。
つとこゝろえしのぶがおしやく ウ、、、、河ら
んまるへさすところなれども。なのうのつ
ぼねがまひのひとて。つかれをしやをるそ
のためよ。つぼねへさかづきさしまをす。
これは〳〵ふつゞかあひとかなで。ぎよゐ
よかなふてこのうへもなきみのめうがと。
いひつゝつぼねはおんさかづきすこしひ
きうけさしおけば。はるながこう、ゑつ
ぼよいり。河ナニ、らんまる。つぼねがあひを

つかまつれと。「おもきごぢやうもへつらひ(イロ)
ふく。汐コハ、おほせよ候へども。いつてきも
およばぬそれがし。このぎはひとへよごか
うめんを。ハテさて。のまぬところをのます
がけふ。さかなはなんぢがのぞみしだい。
スリヤ、おさかなをくだされふとな。ホ、、ろく
じふよしうをてよにぎるこのはるなが。サ、、
なんなりともものぞめ、〳〵。ハア、、おからば
なにとぞおのらんまるよ。ぐんぜいを四五
せんばかりくだしたまはらば。ありがたか
らんとあひのぶれば。ム、、こゝろえぬなん
ぢがのぞみ。もしぐんぜいをあたへなば。

さん候。たんしうかめやまへおしよせ。たゞ一せんよみつひでがくびうちとり。きみのわざはひをさけまをさん。なるほど。もつともなる祢がひなれども。いらざるしんぱいむよう〳〵。さやうなことよほねをらぞと。「はやく一ッこんかたむけて。」あつさをしのぐが〳〵みのやうじやう。「ねぶシウタイ」とびたつばかりありあけの。「ハル」よるひるとなきたのし「ナヲス」みの。にいぐわふもろようふも。このはるながよはおよばぬ。「キメ」〳〵。わがきみのごぢやうよは候へども。あづちのむ祢んをさんぜんと。いちどはむほんのはたをあげ。き

うそかへつて、おんみのだいじ。ァ、さをが
はわかげなり。ほつこくよゐばたかついへ。
さいおくよはましばひさよし。りようよ
つばさのをだはるなが（キメ）。きみのごぢやうは
さることながら。らんまるどのゝことば
のごとく。ゆだんたいてき。（ハテサテ、）つぼ祢ま
でがおなじやうよ。いらざるこのばのなが
せんぎ。おきやくじんがさぞふら〳〵ねむ
り。みもほつとたいくつ。（イデ）一ッをいのゆめ
のまの。ちぎりはいざと（ム）たわむれて（フシハル モつり）
ざをたち（かゝもいこゝ）たまへば（ゐいもろ）なのうのつぼ祢。（ヤ）わ
かぎみいざなひゐづ〳〵とてうだい、——

ふかくいりたまふ。あとよううつとりらんまるが。こゝろひとつよとつをいつ。おもひはおなじをんなぎの。ひとめ、ゐのぶが、よりそひて。まをしらんまるさま。もうなんどきでござりませうなァ。これはゐのぶどの。そもじはまだおくへゆかぢか。アイ。ハテさて。それはふらちせんばん。ごようもあらんはやおくへと。いふかは じつとうちながめ。ほんよまあ。をんなのこゝろとをとことは。それほどまでちがふものか。あにさいとうくらのをけどのよおたのみまをして。はるながさまのおくづとめも。

あなたのおそばよゐたいばつかり。いまさらいふも、はづかしながら。合おそのはつはるらくとうの。ぢしゆの。合おようはの、はなざかり。こしもとどもよ。いざなはれ。ねがひかけまくはつこひの。いろもかもあるとのごぶり。合くわんおんさまのおなかだち。合たがひのむねのしたおびも。とけてうれしいよいまくら。かはるまいぞのおことばが　をぐよこゝろのせいしぞと。合四間かたときわをれぬにようぼうが。おそばよゐるがおいやなら　いつそてよかけたまはれと。ぴんとを祢きの、いとざくら。はなも、

下ノ佐和利三絃符号ハ一ノ巻ニ詳シク記シアレバ茲ニ略シヌ該巻ト對照アルベシ

みだるゝふぜいなり　さしもよたけきらん
まるも。こゝろのほかの　くせものよ。と
りひしがれて。せなゝでさをり。河イヤもう。
なにごとなふまをせしが。おきよさはらば
まつぴら、〳〵。百まんのがうてきよも。
びくともせぬそれがしが、かくのとほりと

てをつけば。河ヱ、またひとをじゆつながら
ものかいなァ。はるながさまもおほかたよ。
はんぢよが祢やの　おむつごと。おつぼ祢
さまのとりかぢでふねのしやうばん。サア
ござんせとてをとれば。河ハテさてたしなみ
や。ひとめをおのぶふたりがなか。ことよ

おとひはきみのとのゐ。「またのしゆびをと
ふりきるをむりよ。ひきたておくのまへ。
いるやいるさのつきかげに。上ギン ちのぶのみ
だれ、㊁みだをあふ。「ハヽ わりなき ゆめや
むをぶらん。「ロ フシハル はやふけ わたる。ギン なつの
よの、そよふくかぜももものをごく。「ン ねられ

ぬまゝよおんたいちやう。「てづからちやう
じおしひらき。「セ なよごゝろなくちげみのか
た。「ヤ みやりたまへば「ヽ「ケス ざわぐ〳〵と ハヅミ おどろ
き 合 「ヒリカンモヘロンイヽ、、さわぐ祢ぐらのとり。合エリン。ケハリン。ヌ
ハリン。ニハリン。ヒヽヌヽヽヽ

れさわぐむらとり。がてんゆかじときつと
めをつけ。あやしみたまふ、ときしもあれ。
とほねよひぐくかねたいこ。はる
ながつゝたち、みゝそばだて。アレ
くゐだいよちかづくにんばのものおと。と
のゐのものはあらざるか。いそぎものみを
つかまつれと。おほせのしたよ
りなのうのつぼね。なぎなたかいこみ、はし
りいで。ノリ合ケ。ケーエケくゝゝゝきみのだいじよ候ぞや。らんまるどのはいづくよある。はや
くものみをいたされよ。わらはもともよと
おもてのかた。よばはり〳〵かけ

⑩(ヲヲヲヲ)(いねろ)
りュ ゆく。合(おいいい) きくよらんまるひとまよ
り。(ろ)とんでいづればはるながこゑかけヤアく(イロ)
らんまる。合同(ヲいね)詞地 ほんぎやくありとおぼえ
たり。(ち)いそぎものみをつかまつれと。(ヲン)ぢや
ういよ、(ヲ)そつとらんまるはふりかへりみる
らうかのかうらん。(ヲ)これさいはひのものみ
ぞと(ヲ)いふよりはやく、かけあがり。(いねろ)合
四ほうをきつとうちみやり。(イロ)合(っっっっっっっっっ)ものの
のあいろはわからねど。(つン)このほんのうじを
こゝろざしおしよをるは。(つ)さつをるところ
たけちみつひで。(ねン)ム、。スリヤみつひでがほん
ぎやくとふ。ハァいまこそこうくわいふんぢ

がいさめ。きゝいれざるもかたむくうんめい。たゞこのうへはふせぎのようゐ。ハァ、いさいゑやうちつかまつる。がたとへいつちよふせぐとも。ゐんがいわづか三百よにん。おもへば〳〵。しゆくんとともよ。らんまる。わがきみさま。ヘチヱ、くちをしやとゑうゝが。いかりのはがみさかだつかみ。むねんスエテ なみだの、をりからに。合ヲビダシにはよ、おほいきつぎ。合ノリ おもてのかたより、もりのりきまる。ひろごゆだんあるなよじやひと。たけちみつひでわがきみよ。アカンムたねんの、うらみをさん

ぜんと。(ヰ)らつ、ン二つ(ヤ)てぜい　をぐつて四せんよき。合

ねやねケくカンねケエサエエねケやくくくエスねスな

さま五らうをはじめとし。

(チ)あるひはさいとう、くらのをけ。合らつくムかつ、つい

ぢ、まぢかくおしよせて候と。(ヌ)いふまも、

あらぞらんまるは。(ル)そのまゝひらりと。合りカン。

(ヲ)とびおりて。合り わがきみよはおそれなが

らふせぎやの。(ワ)ごようゐあつてしかるべし。(カ)それがしがかゝこよむかひ。(ヨ)ひとあてあてゝねむりをさまさん。(タ)りきまるきたれときやうだいはとぶがごとくよ、合らくくかけりゆく。あとうちみやりはるながこう。(レ)おのうへはふせぎのひとや。(ソ)まづさ

しあたつていちだいじは三ほふし。ね 河ヤア〳〵
そうぎ。わかをいざなひはやく、〳〵。合〳〵つつつ
ごぢやうのしたよ、道具屋 かい〳〵しく、ね
のぶもろともさどうのそうぎ。わかぎみい
だきまゐらせて、あしもわな〳〵どうぶる
ひ11。ものぶもともよ、うろつく、ところへ。

合たぜいをきりぬけなのうのつぼね。そ
のみはをかしよの、いたでながら。ちよそ
むなぎなたかいこんで こゝろもごうよ、
たちもどり。イロ 合エーケエケ〳〵ねゝのつつつまをし〳〵わがき
みさま。もはやてきはこみいつて候へば。
きみにかわつてひといくさ。おんみをのが

れくださるべしと くちよは、いへどおん
なごり。なみだいやまをばかりなり。おろか〳〵。なまなかみをのがれんとかへつてふもなきやつばらよ。くびをわたさばしごのちゞよく。なんぢはわれよなりかはりそうぎひきつれさんほふしを。なよとぞしゆごしおちのびて。このはたもろともひさよしがてにわたし。わがぞんねんを、そらさせよ。いうよはかへつてふちうのいたりと。おほせよわつと、なきくづをれ。たとへふちうよなるとても。きみのごさいごよそよなし。なんとこのまゝ、おちられ

ふゑヲ——。このぎはおゆるしくださりませ。合四間これをおもへばみづからが。よひのしゆゑんのそのときよ、はんぢよが祢やのかこちごと。そのひとさしのあふぎとは——。わかれをつげしおらせかと。おもひまわせばいとゞおほ。かなーいわいのと——。

どうとふし、なげき、おづめばおだうりと。こゝろをくんで、もろをそでをーぼるおのぶがともなみだ、なくねをそゆるゥ、、、、合ヨビダシあまたのきりくびかたでよひつさげにはさきへ。たちかへッたるもりのらんまる。それとみるよ

りはるながこゑかけ。（汐ホ、いまよはじめぬ
なんぢがたたらき。（シテ〳〵やうをはいかよ、
〳〵。（ヲス ハヽア。）されば候。二ケ一でうのごしよへは
たけちみつやをたちむかひ。たうてのよせ
ては　さま五らうみつとし。さいたいとつ
てきびつきげぢ。なれどもみかたはひつし
のゆうぢや。ごらんのごとくびうちとり。
ひとあはふかせ候へども。ぢごうのぢよ
うりは。（ホ、なるほど〳〵。たゞこのうへ
はいさぎよく。ぢでさんづもぢゆうじうと
もよ。（サア、いまきくとほりのわがかくご。は
やくこのばをおちのびぬか。たゞ〳〵三ぜの、

ゑんきらうや。サア、そのぎはなァ。ヤァゑん
きるがかなーくば。一ッときもはやくおち
のびよ。コレサおつぼね。きみのせんどをみと
どくるはこのらんまる。へんしもいそぎう
らもんより。コレサ。そうぎぼうは　なよをう
つかり。ヲットがつてん。イヤもうさいぜんから
おちたうて〳〵きはかみづり。コレく、ゑ
のぶどのも、おとものようゐると。いへどさ
をがよゑのびづま。いひたいこともおもて
ぶせ　ゑをれ。なく〳〵たちあがれば。ら
んまるこゑかけ。ゑのぶはわかのおんと
もかなはぬと。きいてびつくりおどろくゑ

のぶ。ね（汎エ）、そりやなゝゆゑ。（ホ）、なんぢゝおとがめなければども。そちがあゝさいとうくらのをけ。みつひでゝいちみのほんぎやく。かたきのするゑはねをたつてはをからを。いのちをたをけそのまゝかへをはこれまで。（サア）、これまで。きみへのみやづかへとあけていは（ヒ）ゐどいもとせの。なかをへだてのかきとなる。ね（ハ）ゐのぶがうきみせんかたも。なんだながらゝようゑのくわいけん。のんどゝがばとつきたつれば。（コハ）なにごとゝおどろくひとゝ。たいしやうはるながかんじたまひ。（イロ）（汎ホ）、をんなながらもあつぱれ

のしやうがい。あにとひとつでないけつぱく。こんにちたゞいまはるながゞなかうどし。らんまるがやどのつま。こゝろのこさぞじやうぶつせよと。おほせよておひらんまるも。そつとばかりよありがたなみだ。かほよもみぢのから、くれなひ。ちしほよそむる　りやうのてを。あはをも二せのなごりぞとものいひたげよをつとのかた。おんたいしやうを　㊦　ふしをがみ。ゑがほをしやばのおきみやげ。あへなくいきは、たえにけり。合「ヲヽイヽ」なげきを、よそよおんたいしやう。「ヲヽイヽ」いさみをつけんとヤア〳〵らんまる。合

われはこれよてうつてをひきうけ。「チ」このばをさらぞうちじにせん。「ね」なんぢはこれよりはせむかひ。「ン」てきのやつばらひとあはふかせ。「ヤ」なをばんてんよかぞやかせよといさめたまへば（ハチノハシ〳〵ヤスリ上）おほせにや、おようべき。（合ロッポウノリ）たとへみつひでなんまんぎよてよをるとも。「ヤ」かたはしなできりまくりたて。「ユ」きみのおんともつかまつらんはやおさらばと（行）たちあがれば。（合「ユニハモロ〳〵」）ふみだを、はらひそうぎぼう。「つ」つぼねをいさめ（サスリ上）もゝむれば。ぜひもふみだよそでのなみだぞよひ。（合ぬっとつなぐ。）ながらァ、〳〵（リ）わかぎみを。「ハモ」そうぎ

が、いせなよしつかりと。㊁これぞ あふぎの
うきわか——れ。みかへるなごり、みおくる
なごり。ま合たゝちもどるをらん
まるが なかをへだつる。上ときのこゑ。合
はやみだれいるしよぐんぜい。㊂きり
たてなぎたて——をんふむしや。

そのおもたかきかながきの。ふで——。
とゞめてをへのよのびだんと。こそは
「ふりにける」

一の谷嫩軍記　二段目

作者　並木宗輔

並木宗輔、通稱は松屋宗介、千柳と號す、舍柳、市中庵は其別号なり、淨瑠理、狂言作者に並木の姓を名乘もの多し、宗輔は實に並木氏の元祖なり、享保の始より浪華豐竹座の作者となり、數番を著せり、忠臣金短冊、那須與一西海硯、苅萱桑門筑紫轢、和田合戰女舞鶴、金淵雙級巴、道成寺現在鱗、等尤も世に行はる、寛保二年江戸肥前椽座に聘せられ、石橋山鎧襲、等の戯曲を作れり、居ること數年にして故郷に歸り、一之谷嫩軍記を書きさして病歿せり、即ち三段目迄を作りて遺せしに、淺田一鳥、並木正三等、之を補ひて完結せしむ、所謂壇特山より陣屋の段に至る、敦盛身替の條は全く宗輔が意匠になれるといふ、時に寛保二年九月七日、享年五十七歳なり

一の谷嫩軍記

上 おふてゆく。三重 汐あつもりさま。たいふさまいのふ。このくらいのまたゞおひとり。あぶないはいのふおかえりと。いへどあてどもなみちかき。いそばたをうろ〳〵とそではなみだのたまおりひめ。をつとをたづねお

ぼろよこゝろほそみの一ト こしかいこみ。
あなたへはしりこなたへまよひ。すまの
うらべをそこよこゝよとたづね。さ
まよひたまひけり。はやゐのゝめに
ひとかほも。ほのかみえしやまみちより。
合ヨどつーとねー ひらやまのむしやどころ。や

うー よげのびすまのうら。こまのあしを
やをめんと。あばらくいきを。つぐうちよ。
たまおりひめとみるよりも。やがてうま
よりとんでおり。つかー とたちよつて。
汐コレおむを。テモよいところでぞあひました。
いつぞや京でみそめてから。めのさきよち

らつくやうで。おきてもねてもわをられぢ。
おもひあまつてそさまのおやごときたゞ
どのへいふたれば。やらふとあるをさいは
ひよ。むかひよやつたそのあとでも。ァ、き
むをならじゆつなかろ。ァァねてからどうし
てかうしてと。ほんよ〳〵どこもかも。き
のやうよなつてまつてゐたよ。むかひよい
たげんばをころし。ようまちぼうけよめさ
つたなふ。ハサァのりものゝかはりこのうまよ
のせ。カシつれていんでにようぼよをると。ヒ
きたつれば、ふりはなし。イロ汚エ、あたいやらし
い。おやがゆるそがどふせうが。あつもり

さまとは一せのやくそく。かういふうちよ
もおゆくゑたづね。あふてゐなばいつしよ。
「じやましやんなとかけゆくを。ひんだか
へ。ㄎㄇ、あつもりをたづぬるのか。コレゐん
ぼたづねてもあつもりのゆくゑ。みづのそ
こまでありしよはゐれぬ。そりやなぜよ。

ヲ、あつもりはたつたいま。わがてよかけう
つてしまふた。ヤアなんと。あつもりさまを
うつたとやハア。「」はつとばかりよどうとふ
し。「」ひとめもわかぎこゑをあげ。なげきし
づませたまひしが。「」をつとのかたきとみが
まへしきりつくる。「」うでくびつかんでヤアこ

いつてむかひか。（イヒ）河（ヲウ）りようけんならぬと
いふところをいはぬ。（テモ）このてのやはらか
さじんじやうなことわいな。（モ）どうも〳〵
ヱ、むしやぶるひのもるほど、どうもならぬ。
（コレ）わるいがてんじや。とんとこゝろをい
れかへ。おれよもたがふきよならしやれ。

にようぼよもつてかあいがる（サヽヽヽ）ノどう
かく〳〵とねこなでごろ。ひめはいかりのな
みだまじり。河（コリヤ）よがよならそちがやう
な。むくつけなさむらひは。あたりほとり
へもよせつけぬよ。もたがへのなびけのと
はけがらはしい。いまはしいヱ、。はらたち

やとまたきりつける。うでくびねぢあげとつておさへ。河サアなるか、ならぬか。いやならころをがなんと、なんと。たちぬきもつてぼうじやくぶじん。河ヲ、ころさばころせちくしやうめ。ヱ、たれぞつよいひとがきて。こいつをきつてくれぬかと。ケンスエアもだへたまふぞいたはし。がうきのひらやまむつとせきあげ河ヤアにつくいをんなめ。なびかぬうへよいろ〳〵のざうごん。はぢつらかゝされかんにんならぬ。いけおいてひとのはなとながめさをもむやくしい。おもひあれともつたるかたな。むないたぐつ

とつきとほせば。「あつとひところくるしむ
をりから。合ヨビ「うしろのかたよ
ときのころ。をはまたわれをおひくるや
と。「こまをひきよせとびのつていつさん
よ。「そのば「はるかよ
ねいいいいーすりよ「ちつへせ、、、ウタイさるほどよ。おんふね
をはじめて。いちもんみなく〳〵ふねようか
めば。のりおくれじと。みぎはようちよれ
ば。ござふねもひやうせんもはるかよ
三重「おちたまふ。「むくわんのたいふあつも
りは。みちよててきをみうしなひ。「ござふ
ねよはせついて。ちふつねもりよみのうへ

をゝつげゐらもことありと。すまのいそべへいでられしが。ふねいつそうもあらざれば（ハツミ）せんかたなみよこまをのりいれおきのかたへぞうたせたまふ。（ねいシヤウタイ）かゝりけるところよりしろより。くまがへのじらうなほざね。ヨイ〳〵ところゑをかけ。こまをはやめておつかけきたり（合大ノリ）ヤア

それへうたせたまふはへいけのたいしやうぐんとみたてまつる。まさなふもてきまようしろをみせたまふかひつかへして（スリ下）ゐようぶあれ。（合ノリ）かくまをそれがしはむさしのくにのぢゆうにんくまがへじ

らうなほさねげんざんせんかへさせたまへと。あふぎをあげてさしまねき。ゐばし〳〵とよばはつたり。合てきよこゑをかけられてなにかゆうよのあるべきぞ。あつもりこまをひつかへせば。くまがへもをゝみより。たがひよううちものぬきかざし。合あさひにかゞやくつるぎのいなづまかけより。かけよせてう〳〵。合てふのはがひしもろあぶみ。こまのあゝなみ、かつし〳〵。合よろひの、そでは、ひら〳〵。

ケリカン〳〵ぬケレつりつ上 ㊦ むれゐるちどり 一 ㊦ ねぐ上り 二 むらちどり、「むら〳〵ぱつと、ひく〳〵ほよ。よせてはかへり。かへりては、「立」また〳〵うちかくる。「きよ〳〵じつ〳〵。合つゝムねいゐいね ゐよようぶもはてゝあらざれば。いさふれくまんとあつもりはうちものがらりとなげたまへば。コハ、

ゐほら〳〵とくまがへも。たちなげをてゝこまをよせ。「ばじやうながらむづとくむ。ゐ〳〵いく〳〵のこゐのうち。たがひよあぶみをふみはづし。「りやうばがあひよどうとおつ。すはやとみるまよくまがへは。あつもりを、とつておさへ。汎かくごうんのき

はまるうへは。おんなをかのりなほざねが。
かうめうほまれをあらはしたまへ。また
こんじやうまなごとにても。おもひのこ
をおんことあらば。かならずたつしまいら
せん。おほせおかれ候へと。ねんごろまま
をもにぞ。あつもりおんこゝろ、さはやか
よ。やさしきこゝろざし。てきながらあ
つぱれゆうゑ。かくかさけあるものゝふの
てにかゝり。死せんこと〳〵やうぜんのめ
んぼく。せんじやうよ〳〵おもむくより。いい
へをわをれみをわをれ。かねてなきみと
しるゆゑよ。おもひおくこと。さらまな

ー。「さりながらわれがたきはふぼのごおん。「われうたれしときゝたまはゞ。さぞおんふげき。「おもひやる。河せめてこゝろをなぐさむため。うたれーあとよてわがしがい。かならずもちゝへおくりたまはをかし。われこそさんぎつ祢もりのばつし。むくわんのたいふあつもりと。「ふのりたまひし、「いたはゝさ。「ぼくせきならぬくまがへーもみるめなみだよ。「ぐくをけるが。「なにおもひけんひきおこし。「よろひのちりをうち、「たらひくー。河このきみひとりたをけーとて、かちいくさにまけもせまじ。をりふーほかよひ

ともなし。ひとまづこゝをおちたまへ。はやう、〳〵といひをてゝたちわかれんとをるところよ（合ヨビ「おいねい」）うしろのやまよりむしやどころあまたのぐんぜい（ヤア〳〵くまがへ。合ノリ「エツバツムつ」）へいけがたのたいしやうをくみしきおがらたをくるはふたごゝろよまぎれなし、きやつめともよのがをなと、こゝろ〳〵よ。のゝ〳〵るよぞ。くまがへはそつとばかり、いかゞ。「メ」せんと（「ハ」もくぜんたり。）あつもりきやう、「ニ」ゝとやかに。とてものがれぬ、へいけのうんめい。こゝをたをかりゆくさきよて。げをげらうのてよかゝり。

しよはぢをみせんより。はやくおんみがて
よかけて。」ひとのうたがひ、はらされよと。
「チ」にしよむかひて　てをあはせ、おんめを
とぢて、まちたまへば。いたはしながらく
まがへはおんうしろよたちまわり。」みだの
りけんとこゝろよゐやうめう。ふりあげは
あげながら。」たまの、」やうなるおんよそ
ひ。」ふさけなやむざんやと。」むねもはりさ
くきおくれよ。」つゝ——
たちふりあげしてもよわ
り。おもひよかきくれうちかねて。」なげき
よときも　うつるよぞ。河ア、おくれしかく
まがへ。はや〳〵くびをうたまよと。」ねぢ

むきたまふおんかほを。みるよめもくを、
こゝろきへ。（河）せがをこごらうなほいへと
まををもの。てうどきみのとしかつこう。
こんてういくさのさきがけして。うをでせ
うゝおふたるゆゑ。ぢんやよのこしおい
たるさへ。こゝろよかゝるはおやこのなか。

それをおもへばいまこゝでうちたてまつ
らば。さぞやおんちゝつねもりきやうの。
なげきをおもひをござをてと。さしもまた
けきものゝふもゝ、そぞろなみだよ、くれゐ
たる。（河ア）、おろかやなほざね。あくにんのと
もををて。ぜんにんのてきをまねけとはこ

のこと。「ヒ」はやくびうつてなきあとの。「モ」ゑかうをたのむ、「モ」さもなくば。「ろ」ゑやうがいせんと、を、められ。「ユ、ァ」、ぜひなしと、「つ」ゝたちあがり。詞じゆんゑんぎやくゑんともよぼだい。みらいはかならぞ一きんたくしやう。ふむなみだぶつ。〳〵。「ン」くびはまへ

よぞ、「ヤ」おちよけり。合ムヘヒツメ、ひとのみるめもはづかしとおんくびをかきいだき。「ユ、」くもりしこゑを、「つ」はりあげて。合大ノリ「ムつ、」へいけのかたゝなもたかき。「つ」むくわんのたいふあつもりを、くまがへのじらうなほざねうちとつたり、とよばはるよぞ。「ユ、」いそよふしたる

たまおりひめ、たへいりしきも一トそぢよ。
をつとをまたふねんりきのみゝよいりし
か、むつくとおき。河ノウまばしまつてたべ。
あつもりさまをうつたとは。いかなるひと
かノヲうらめしや。せめてなごりよおんかほ
を。ひとめみせてといふこゝろも。ふかでよ
よわる、いきづかひ。みるよりくまがへお
んくびたづさへ、あゆみより。河あつもりを
またひたまふは、いかなるひと、とたづぬ
れば。メいまはのヲヽくるしき、こはねよて。
われこそは。あつもりのつまとさだまるた
まおりひめ。おくびはどこよ。ヱヽ、もうめが

みへぬとなでまはせば。ムヽ、なに、おめがみへぬとや。ヲ、いとしや〳〵。おんくびは、コレ〳〵、こゝに。」〳〵とてよわたせば。ハつとなく〳〵ゑがみつき。ヒざよのせ〳〵。ニヒヽきゑめて。中きへいりムたへいりなげきしが。汎ノフこれあつもりさま。ァ、はかないをがたよなりたまふのふ。ゞぢんやをいでさせたまひしより。おんあとゑたひほう〳〵と。たづぬるうちよげんじのぶし。ひらやまのむしやどころ。われをみつけてむたいのれんぼ。だまし〳〵うたんもをんなわざ。このごとくてよかゝり。ふたりが〳〵で、かゲなゑひ〳〵

さいご。「せめてわかれまおんかほが。」みてーまたいとおもへども。ふかでまこゝろがひきいりて。めさへみへぬかかなやと。「またおん、「くびを　なでさをり。」よひのくわげんのふにのとき。のちまとありしおことばが。「こんじやうごしやうの、かたみかや。「上」このよのえんこそうをくとも。らいせではをへながふ。そひとげてたべわがつまと。かほまあて。「みまそへて。おもひのかぎりこゝろか　ぎり　なくねはすまのうらちどり　なみだま　ひたをそでのうみ。「ひくしほどきとひくいき

の。「ソン」ちしごとみえて、たえはてたり。「ムム」くまがへはぼうぜんと。河エどちらをみてもつぼみのはな。みやこのはるよりおらぬみの。いま。「ヲ」たましひは、あらざるが。「ヤ」ひなよおりてなきあとを、とふひともなきすまのうら。「ヤ」なみ〳〵ならぬひと〳〵の。「ヅヽ」なりはつるみのいたはしや。「ヅヽ」ひたんの、なみだよ「ム」くれけるが。「ム」合ぜひもかく〳〵たまおりのなきがらを　とりおさめ。合ほろをほどいてあつもりの。「ヅヽ」おんしがいを、おゝ〳〵つゝみ。合文彌あげまきとつて、ひきむをび。合たづなを　たぐりゆ

ひつける。合ねいろくらのしほでやをほ〳〵
と。ヲ、ゆんでよおんくび、たづさへて。みぎよくつわのあはれげよ。「だんどくさんの。うきわかれ、したたいをおくりたる。をやのくどうじがかなしみもお合ねがつて
な じ合四間おもひの。かたたづ
なふみだ。「ながらよ 三重「ひいてゆく」

一の谷嫩軍記

三の切

ヲクリ

「おくへつれてゆく。さがみは「いざやう じおしひらき。ひもはやにしよかたむきしよ。をつとのかへりのおそさよと。いまつまほどなく。くまがへのじらうなほざね。はふのさかりの　あつもりをうつてむ

じやうを　さとりしが　メさをがよたけきも
のゝふも　スエテ　ものゝ|あはれを　いまぞ志
る。ヘセ　おもひを　むねよ　いたちかへり。一つ
まのさがみを志りめよかけて　いざよなほれ
ば。ぐんじはやがて、一おほひよなり。刊さき
だつてへいじかげたかどの。なにか、せん

ぎのをぢありとて。みかげのいしやをひき
つれおんいであり。おくのひとまよおんま
ちと一いさいをのぶれば。ムウ、せんぎ一と
はふにごとならん。アイヤ、そのほうはいつこ
んのもよほし、かぢはらどのをもてなしま
をせ。サ、はやくいけ、〳〵。ハテ|さてなよを

ゆうよをると。いおかりちらされぜひなく
も。さがみよかほをみあはしてこゝろを。
のこしいりよけり。あとみおくつゝて。く
まがへは河コリヤによようぼう。そのほうはこゝ
へなにしよきたヤイ。くよもとおゆつたつの
せつ。ぢんちうへはたよりもむようと。か
たくいひつけおいたるよ。ことばをそむく
といひ。あまつさへ、をんなのみでぢん
ちうへきたること。いふとゞきしごくのをん
なめと。ふけふのていよさがみはもぢ
〳〵。そのおしかりをぞんぢながら。どう
かかうかとあんじるはこじらうがうい

ぢん。（ね）河一りいたらやうをがおれふか。五りきたらたよりがあろかと。七りあゆみ、十りあゆみ、百りあまりのみちをついみやこまで、ヲホヽヽ。ヲ、おんき。（七）のぼつてきけば一のたよとやら（ろ）でいまかつ（い）せんのさいちう（ね）と。（七）とりぐ（ゝ）のうはさゆゑ。こよひかされ（ゝ）るは（いね）おやのゐんぐわ（ろ）。ごりようけんなされ（一）くださりませ（いね）。河マアこのこごらうはそくさいでゐまをかと。（一）とへばくまがへ（一）ことばをあらゝげ（ちんね）。河ヤアせんじやうへおもむくからはいのちなふきもの（つた）。けんごをたづぬるみれんなしやうね。もしうちじよおた

ら、なんとをる。ィ、ゐいお。こじらうがう
いぢんよよきたいゐやうとひつくんで。う
ちじよでもいたしたらァうれしひことでご
ざんゐよと。をつとのこゝろよゐたがひし。
けなげなことばよ（ヤ）がんゐよくなほし。
汚ホ、まづこじらうがてがらといつぱ。ひら
やまのむゝやどころとあらそひぬけがけの
かうめう。ぐんもんよかけいつてのはたら
き。てきをせうゝおふたれども。イヤモまつ
だいまでいへのほまれ。ェ、、してそのてき
をは、きうしよではござりませぬか。ッ、ソレ。
まだてきずをくやむかほつき。もしきうし

よなら、そちやかなしひか。イ、ヱなんのいな。かをりきぎでもおふほどのはたらきはでかしたとおもふてうれしさのあまりおたづね。そのときおまへもこごらうと。いつしよよおいで　なされたか　ホ、ウあやうしとみるより、ぐんもんよかけいり。こごらうをむりよひつたてこわきよひんだき。わがぢんやへつれかへり。それがしはそのいくさよ　からめてのたいちやう。むくわんのたいふあつもりのくびとつたり、とはなーよさてはとおどろくさがみ。うしろよきみるみだいどころ　わがこのかたきとあ

りあふかたな。くまがへ／やらぬとぬくと
ころこじりつかんで汐ヤア かたきよばはり、
なにやつ、と引きよをるをにようぼうと
りつき。ァ、これ〳〵れうじなされな あな
たはふぢの おつぼねさまと。きいて
なほざねびつくりし。ハヽヽヽハヽ、こは〳〵

これは。おもひがけなき ごたいめんと
とびのきメうやまひ たてまつれば 汐
コリヤくまがへ。いくさのならひとはいひな
がら。としはもゆかぬわかむしやを。ようむごたらーうくびうつたナアへ。サ、やくそくじや さがみ。をけだちしてをつとをう

たせッなんと。ニ〳〵とかたなおつとりせ
りつけぬたまへばヱねアイ|ァ、あいケねン〳〵と
へんじもゝむねよいせまりながら。ヨヱ、これ
なほざねどの。あつもりさまはゐんのおた
ねとゝりながら。マどうこゝろえてうたゝ
やんした。ゝねやうをがあろふそのわけをと。っ
いふもせつなきうろ〳〵ふみだゑァ、おろ
か、〳〵。ヲスこねヨ汨このたびのたゝかひ。てきとめ
ざをはへいけの一もん。あつもりはさてお
き。たれ、かれとゝのぎをけづるよ。ようし
やがならふか。イヤナアふぢのおんかた。せん
じやうのぎはぜひなゝと。おあきらめくだ

さるべし。そのひのいくさのあらまーと。
あつもりきやうをうつたるおだい。ものが
たらんー とざをかまへ。ルテイ さても。さんぬ
るむひかのよはー や。おの、めとあくるこ
ろ。一二をあらそひぬけがけのひらやま。
くまがへうちとれ、ときつていでたるへい
けのぐんぜいっなかよひときはケ、をぐゥ、ヱヲ
ヱヲ、ヱ、ムいーねニムヒいいろだろし—ひおどし。ルテ。ーーぐぐぐぢろーくさしろ
ものひらやまあーらひかねはまべをさしムつつつ
てヤ、——スリ上にげいだを。ハテ けなげなるわかつ
むしやゝ。ムねよぐるてきよめなかけぞ。くまいねンねい
がへ、これよひかへたり。かへせ。もどせ。

ヲヽイつおゝいとあふぎをもつてうちまねけば。トシ〳〵こまのかゝらをたてなほし。ねいなみのうちもの二たうち三うちいでやくまんとばじやうながらむんづとくみ。りやうばがあひよどうとおつ。汃ヤア〳〵なんと。シテそのわかむしやを、くみしいてか。

されば、おんかほをよくみたてまつれば。カヽリかねくろ〳〵と〳〵ほそまゆよ。一としはいざよふわがこのとしばえ。さだめてふたおやましまさん。二そのふげきはいかばかりと。こをもつたるみの、おもひのあまり。うはおびとつてひつたてちりうち

はらひ。はやおちたまへ。とをゝめさし
やんしたか。そんならうちたてまつるおこ
ゝろでは、マなかつたの。ヲヽサ、はやおちた
まへとをゝむれど。ア、イヤ。いつたんてき
よくみーかれ。なよめんぼくよながらへん。
はやくびとれよ、くまがへ。ナニ、くびとれ

といふたかいの、ヲヽけなげなことをぬいふ
たのふ。サア、そのおほせよいとぞなほ。カヽリ
なみだはむねよ〳〵せきあげ〳〵。まつこ
のとほりわがこのこじらう。てきよくまれ
ていのちやをてん。あさましきはものゝ
ふの　ならひとたちも。ぬきかねしよ。

よげさつたるひらやまが。うしろのや
まよりこゑ〳〵たかく。合大つり つゐつゐ　ヤア　くまが
へこそあつもりをくみしきながらたをくる
はふたごゝろよきはまりしとよばはる
こゑ〳〵。ヱ、ぜひもなや。河おほせおかる
ゝおんことあらば。いひつたへまいらせん

とニまをしあぐれば　おんなみだを　うか
めたまひ。ちゝはゝとうへおもむきたまひ。
こゝろよかゝるはゝぴとのおんこと。長地
きのふよかはるくも井のそら　さだめなき
よのふかを　いかゞをぎゆきたまふらん二、
みらいの　まよ　ひ　これ―　ヱ―

くまがへたのむのごいちごん。ぜひよおよ
ばぎおんくびをとゝはなをうちよりふぢの
つぼねナァ　さほどそゝをばー　おもふなら
つねもりどのゝことばよつき。　なぜみ
やこへはみをかくさず　一のゝたよへは〳〵
むかひしぞ　けふげよよろうたそのとき
は。そゝもとも〳〵よろこんで　を〳〵めて
やりしが　かあいやゐゝかくごのうへもい
まさらよ。むねもせまりてゝかなしやとゝ
くどきなげかせたまふよぞ。ごもつともと
はおもへども　さがみはわざと。　こゑはげ
まし。　イヤ　まをしおつぼねさま。ごいちも

んのこらぜ八しまのうらへおちゆきたまふ
なかよいちにんふみとゞまり。うちじよ
なされたあつもりさま。すまんぎよをぐ
れたかうめう。たゞしよげのびみをかくし。
ひとのわらひをうけたまふが。おまへの
きではうれしひか。ごみれんなごひき

ようなとーいさめよくまがへ。（河ヲ、）でかい
た。〳〵。（コリヤにようぼう。みだいどころこの
ところよござあつてはおためよならぬ。へ
んしもはやくいづかたへもおともせよ。（サア
く、はやくいけ、く。（われもあつもりの御
くびじつけんよそなへん。（ヤア〳〵。つぐんじ

下ノぐんじナルハケノ音ニテ語リ出スベシ

はおらぬかはやまゐれとよばはるこゑと
もろともよ　ひとまへ「こそはいりあひの
かねは――むじやうのときをうつ――
ぢんやくのともしびよいとぐ。かなし
さ――ふぢのかた。ア、おもひいだせばば
ふびんやな。いまはのきはまでもはだみは
なさぞもつたるはコレこのあをばのふえ。
われとわがみのせきとうを　たてゝもらふ
たあたへよと。わたしておいたこのふえの
わがてよいりしも〳〵おやこのえんこん
ばくこのよよ〳〵あるならばなぜたゝよはま
みえぬぞ。きこえぬわがこや〳〵なつかしの

下ノ魂魄ハケノ絃音ニテ語ルベシ

このふえやと。はだよつけ。みよそへてつ
きせぬ　おもひやるせなき。（中フシ）　汐コレまをし。その
ふえがよいおんかたみ。きやうだらよより
ふえのねを。たむけるがをぐよつゐぜん。
あつもりさまのおこゝろをば　きくとおもふ
てあそばせと。（イシ）（ニヽヽヽヽ）ここを〳〵をめよ　あたがひふぢの
かたなみだよ　あめ——を——（ニシリヽ。）〳〵。ふりヽ
ゐりつヽ。ヤぬけりゐりつり　ユりカン。つレユレユつレつりカン。ユりカンヽヽヽヽ
ろ〳〵　おやこのゝ
んのきづなよや。しやうじようつるかげ
ろふの　をがたはたゝかあつもりきやう。
ふぢのつぼねはひとめみるよりヤレなつか
ゝやのわがこやと　かけよりたまふを　さ

下ノ相模ノ言葉ハ口調ヲ早メテ語ルベシ

がみはだきとめアヽコレ〳〵。いね河からのけむりよ
をがたをあらはし。さねかたはしゝてふた
たび都（みやこ）へかへりしも。一ねんのなをところ。
サアあるまいことよはあらねども。いぶか
しきしやうじのかげ。ことよおやこは一せ
とまをせば。ごたいめんあそばさば。おをが
たはきへうせん。イヤなふ（ケ）しゝじゝう九よちが
そのあひだ（ヌケエ）たまゝひ―ちうよ―まよふと
きく。せめてはあふてひとことをとふりは
なし〳〵しやうじぐわらりとあけたま
へばうちをがたはみえずひおどしのよろひ、
ばかりぞ、（ヤスリ上）のこりけりハヽアヽはつとばかり

よふぢのかた。さがみもともよとりついて
さては よろひのかげなるか。こひしとま
よふこゝろからおもがたとみえけるかと。
ともよこがれてしやうたいもなきくどく
こそあはれなれ

伽羅先代萩御殿　政岡忠義の段

おしあけいりにけり。あとみおくつてま
さをかが。まさふきこともみにかゝるが
とがめはれてもはれやらぬ。やしふひぎみ
のゆくすゑをいたれこにとふべきやうも
ふくおゝろ。ひとつのうきおも

ひ。ものあんじふるはゝおやの。かほをふ
がめるせんまつよ〳つるきよぎみも。うち
まもり。コレうば。ふよいふてもだい
じふいかや。ハィ〳。ほかよたれもをりませ
ぎ。ふんふりともぎよい　あそばせ。ほん
にさつきよおきのゐどの。わかへごぜんを
あげたとき。かねてうばがまうしたことお
き、、わけあそばして。ようマア　おあがり、
あそばさふんだふァ。それでこそあのうば
が。おそだてまうしたわかとのさま。ヲ、お
でかしふされた　あつぱれなと。ほむれば
あどふきをさふぎに。ヤイうば。ひもじいと

いふことは。つよいぶしのいわぬことゝ。
つねにそちがいふたゆゑ。おれはいいねど
きつきよから。くうふくに、なつたヤイ（キメ）。
ヲヽおだうりでござります。けふはおもはぬ
ことゆゑに。ごはんもごしらへもおそふふ
り。あふたさまにもさぞおまちかね。せん

まつもようしんぼうしやつた。七（モウ）こしらへ
てあげますと たちあがれば一ノウ（イロ）うば。（いね）こゝ
にあるこのぜんをたべるのはわるいかや。（キメ）
ア、イヤまうし。そのおぜんをあげるほどゐれ
ばうばもくらうはいたしませねど。おのほ
どからあやしいことどども。ちうぎあつきお

きのゐどの。さしあげられたそのおぜん。
うたがひはあけれども。ゆだんのならぬこ
のじせつ。あげてよければこのままをかが
あげまする。コレ、ようおきゝ、あそばせや。
いまおやかたにはあくにんはびこり。ごき
んじゆ。こしやう。ぜんばんまで。ちつと
もおゝろはゆるされず。ちうしんのせつの
すけは。ふぎものとてとほざけられ。ちか
らとするものもなく。あさゆふのごぜんは
みふにはへすてさせて。わたしがてづから
こしらへてさしあぐるも。もしどくやくの。
たくみもと。みぢんもおゝろはゆるされ

ず。くうふくをもおだうりをがら。ごぜん
のおこらへあそばをため。このせんまつも。
二四五(カ、リ)にちまへから(ゃ)三ど(モ)のしよくじもた
つた一ど(ゃ)ちうぎ(ュ)ゆるじや(ー)とこらへてを
りまを(ね)(コレ)せんまつ。そをたはいふことよ
うきいて。ふんともいはずにしんぼうする。

ヲ、かしこい〳〵。つよい〳〵。つはもの
じやと。(ー)ほむればせんまつ(ュ)(ね)(コレ)かゝさま。
さむらひのことゝいふものは。ひもじいめを
をるがちうぎじや。(ー)また。たべるとき(ホ)は。
どくでもなんともおもわず。おをゆうの
ためにはたべるものじやといわしやたゆへ

ふ。わしや。なんともいはずよまつている。
そのかはりちうぎをしてしまふたら。はウレ
やうおまゝをくはしてや。それまではあを
までも。いつまでも。かうきつとすはつて。
おひざにてをついてまつておりまを。お
なかゞすいても。ひもじうないつなんともクル

ないとじうめんつくりトンくくなみだは
いづれどをさゝなぎふ――ほめられたさ
が一ッぱいに汃こちや。なきはせぬわ
いと。ひたひをなでてなきがほを。
かくをおゝろはさすがにも。なにおふ
ぶしのたねなりき。はゝいけな

げさ、いぢらーさめよ　もつ　なみだおゝ
ろには。ーごぜんにきかすほめことば。詞
ヲ、さうじやく　つはものじや。せんまつ
は。いかふつよふなりやつたはいのふ。ヤ
せんまつよりおれがつよい。ヤイ。まさを
か。おれはちつともくうふくにはないぞ
よ。だいめうといふものは。まゝも。なんに
もたべずよ。かうをはつてゐるものじや。
ノウうば。おれはつはものじや。おれはまた
けふといことのホ、、、。さうおぎやうぎな
ところをみては。まだく　せんまつなどは
かなはぬ。ヲ、おつよいく。ヤレマお

つよいことの　ヲホ、、、。そふおつよふては。

コリャはやうまゝをあげざなるまい。ドレこ

しらへふとかいたつて。かたへにかざるく

ろたなより。とりだすにしきの――

――ふくろもの。ふろにかけたる　さは

んふの　ゆの　おゝろみ　をせんまつ

よ。のまを　ちやわんも――。――く――な

――ら　で――　合　ニヽニ　ニヽニ　ニヽニ　ニヽニ　おを

そろがわざを　ーがら　や　いつみづ――

さしを　かしきをけ。　合　くゝくゝ　ながをなみだの　みづ

こぼし。　合　くゝくゝ　くゝくゝ　くゝくゝ　くゝくゝ

こゝろもきよき　ゐなか　あら——ひよ
ね——合　かまにうつ——して　ふろ
のをみ。合　なほして——
——あふーぐ　あふぎさへ。　ほねもくだく
る——　お——も
ひな　——り——。

アレもふまゝじやと　ごきげんの。　わがこ
もともによろこびがほ——　みればむねま
でつゝかくる。　なみだのみこみ、〳〵で。
もふあげまをそへ。　かゝさま。　はやうあ
げましてや。ヲヽあげませいでなんとせふ。
いまあげまする。　がまちつとにえたつその

あひだ。おきにいりのすゞめのこ。モウおや
どりがくるじぶん。そこへなほしておなぐ
さみ　ァィ〳〵〳〵とせんまつがへんじは
それど　たちなやみ　あゆむ　をがたも
たよ〳〵と。　合　おきなほしたるムカン
こととり　かご——　合　ちうと

をしへる　おやどり　の
の。たけに　とび　かはを
う〳〵に　おもやせて　はごくみ　かへ
も——　合　うば　たまの　な
みだァ、、ムニァ、、ムニァ——　合
かくをうな　るが　み　かかれば

をぐにまゝになるねソリヤもふまゝじやと
よろこぶこね河コレせんまつ。なんともない
といふしたから。せわしないなんのことじ
や。いつもうたうすゞめのうた。うたふて
ごぜんのごきげんとりや。ヱヽどんなことであ
るわいなと　しかられてほろ〳〵なみだ

しやくりつゝながらのしめりこゑ合
ヱヘケ〳〵〳〵ねケ〳〵ケヘつゝこゝろカタ
こちのうらのちさのきに
〳〵。すゞめが三びきとまつて〳〵一い
のすゞめがいふことにや〳〵。ゆふべよん
だはなよめご〳〵。たけのしたた
はを　とびおりてかごへよりくるおや

どりの　ゑばみを　すればこすゞめのはし
さしよするありさま　に　詞アレ〳〵うば。す
ゞめのおやがこになにやらくわしをる。お
れもあのよふにはやうまゝがたべたいと。
ことりをうらやむ。　おんこゝろねつヲ、お
だうりじやねといひたさを　まぎらすこ

ゑも　ふるはれて　わしがねケ　むすこのせ
んまつが〳〵合二ノケ二セいニハねケエケね　詞エ、コレせ
んまつ。　とのさまのごきげんを。　ヱ、なにを
なきがほすることがある。　ちひさふても
さむらひじや。　コレ七つ　二ねケ　八つからかなやま
へ〳〵へ　一ねんまてどもまだみえぬ

〳〵（ぬケサエケぬ）うば（メリヤス）まだまゝはできぬかや。ヲヽ、
もふできまする。二ねん（ねケレニセ）までどもいまだ
ニ一（ハルイろぬケエサエケぬり、）みえぬ〳〵。が（メリヤス）ゝさまゝはまだかいの。
ヱ、せはしない。そなたまでがおなじやうぎ
やうぎのわるい。イヱ〳〵。わしはたべたいこ
とはなけれど。ごぜんさまがおひもじから
ふとおもふて。ヱ、なんのおつよいおとのさ
まがおせがみなされふ。ソリヤそちがせがむ
のじや。イヱ〳〵。わしはせがみはしませぬ。
サア。せがまずばいまのうた。こゑはりあげ
てうたふてみやと。つういはれてなみだのこゑ
はりあげ（ぬケぬレレ〳〵ぬ、つ一ク、）ほろり〳〵とおなき

やるが　エ　〳〵。　四間ノヨビ　ちからなく〳〵なき
ごゑを　かくしてつれるはゝおやが　ニ
なにがふそくでおなきやるぞ〳〵　四間合
うたのしやうかもみにあたる。なんだはお
ちが　ヱヨ　むねの　うち　こゆゑの　ヤ　やみぞ
一一一一　中ブン　やるせなき。　わかとのこかげを　一　う
ちなが　ハ　め。　アレ〳〵せんまつ。ちんがくるよべ。
〳〵。ちんよ。こい。〳〵と　一ハモ　よべばか
エケ　けくる　エ　ゑんのうへ　ケリカン〳〵　河ヲ、よいところ
へようきたなァ。ほんにわれはしあはせも
の。おすはりのこのごぜん。とのさまのご
きげんを。なほしたごほうびいたゞけと。

かみをり　しいてならぶればよゝろ〳〵こぶ
ていをみるわかぎみ。　汙コレうば。おれやあ
のちんになりたいと。うらやみたまふ　お
んふぜいきくかなしさをこらへかね　ヲヽ、
おだうりじや〳〵につぽんごくの　そのな
か。にいくおくまんとかぎりなき。ひと
のくわほうをうけたまひ五十四ぐんのおん
あるじと。ゑよう〳〵　はうへもなき
なに　くらからぬおんみにて。おもひがけ
なき　ごしんぼう。たとへいやしいした
〳〵でも。かういふことがあるものか。ま
してやつひにみもきゝも。なみだながら

にまさをかがまうすこと、てをとならう。
きゝいりたまふいたわしや。一げんざいみ
うちのごけらいが。よこしまひだうにくみ
したがひ。せつがいせんとのたくみとは。
しつたるゆゑにかげみにそひ。おまめなお
んみをごびやうきと。せけんをいつはりだ
うよくに一をさないおんみにてうせきさへ。
おもふよふにあげぬゆゑとりけだもの
のゑばむのをうらやましがるおことばは
ごもつともともうりとも。いふにいはれ
ぬおんみのいんぐわすゝめや〳〵いぬにお
とつたる みやづかへしてちうぎじやと。

いはれうものかとくひしばり。むねもにえたつふろさきのびやうぶにひしとみをよせておくをはばかるしのびなき。をさなけれどもてんねんにたいしゆのこゝろそなはつて。コレうば。なんでなくぞいやい。そちやせんまつもたべぬうち。おれひとりせわとおもふなら。もふかんにんしてないてくれな。そちたちふたりがたべぬうちは。いつまでもおれはこらへている。おれがたべても。うばがたべずにしにやつたらわるい。なァせんまつ。そちがしんでもわるいぞァ。ハイ。〳〵。ようおつしやッてつか

はされます。ァ、ありがたふござります。うばがいまないたのは。アリヤ。まゝのはやうできるまじなひ。なにも。かなしいことはござりませぬ。コレ。もふなみだはないな。ごらふじませ。ホヽ。ホヽ。〳〵〳〵ホヽヽヽ。をかしい。〳〵。サア〳〵いまのまじなひで。もふまゝができました。いつものやうに。にぎ〳〵してあげましよと。いひがひとつてのうちに。むすぶをちとせとまちわびてをだしたまへば。汃ァア〳〵おまちあそばせや。ぎんみのうへにもぎんみせねば。ごしんぼうのかひがない。まづおんどくみ

とせんまつが かほをながめて。（ハンね）河ムゝきづ
かひない。（サァ〳〵）ごぜんとおこゝろしづかに（モ）
めしませと。（セ）いふにいそ〳〵おんよろこび（ゝ）
（つゝ）せんまん〳〵ごくをてのうちふ（い）にぎる（ぬ）
おんみにひきかへて。（ゝ）たゞ一（つ）にぎりのにぎ（つ）
りいひをかぞ（ぬ）のちんみとおぼしめす。（ゝ）おん

こゝろねのもつたいふやと（モ）きみをおもひ（つゝ）
わがおを（ゝ）おもひ（つゝ）おゝろのおく（ぬ）のしのぶや（つゝ）（トシノ）
まゝ（つゝ）しのびふみだのをりから（モやゝ）よ。河かぢは
らさまのおくがたおんいり。（ハテ）おゝろえぬ。
かぢはらのおくがた とはなによもせよ
おとほしまうせ。（コレ）せんまつ。そふたはつ

ぎへ。つねぐ〳〵はゝがいひしこと。かゝら
ず〳〵わをれまいぞ。はやう〳〵
とおいやつて。ゑもんつくろふそのうちに。
おきのゐやしほもいでむかひうやまふ
ふすま、おしひらかせかぢはらへい
ざうかげときのおくがた。をつとのけんゐ、
にさかえごぜん。しと〳〵とじやうざにゐ
ほり。河ヲ、どれ〳〵もでむかひたいぎ。み
づからこんにちきたりしは。うだいしやう
のごぢやうい。をつとかげときうけたまわ
れども。よーつなの一ッし。つるきよびやう
きによつて。をとこたるものをきんじたる

ときゝーゆゑ。をつとにかはるヶこのさかえ。よーつないんきよのそのゝちつるきよのーよらう。ことにーよくじもすゝまぬよー。おこゝろをつけられーこのおんくわー。よりともこうよりくだされもの。ありがたくてうだいあれと。もたせーくわーばこさーいだせば。やーほひきとりくく。河コレハ〳〵ありがたい。たいーやうよりのくだされもの。サアくまうーわかとのさま。はやうてうだいあそばーませとーふたおーひらき。河テモマアけつかうなこのおんくわー。イザめーませとさーいだす。さすがわらべのうれ

ーげに。ーたちよりたまふつるきよぎみ。
ア、まうし、ごぜんさま。またそのやうなさ
もーいこと。ごびやうきのおんみなれば。
おどくになつたら、なんとなさる、。こつ
ちへおこーとまさをかがーことばうちけす
ーさかえごぜん。ヤアよりともこうよりくだ
さる、おんくわー。なにうたがふててうだ
いはさせぬ。ぜひこのさかえがたべさせる。
アー、イヤ。それでも。ムヽ。たゞーよりともこ
うのおほせはそむいても、くるしうないか。
サアそれは。サア。サアくくと㊥けんぺいお
しおくよりはしつてせんまつが。その

くわしほしいとひつ、かみ。なんのぐわん
ぜもたゞ一くち。やしほがびつくりさかえ
ごぜん。どくのたくみのあらはれぐち。た
ちまちのうらんめをみつめ。けちらかした
るをりはさんらん。合ふせめ、やしほはすかさずせん
まつが。くびすぢかた てにひきよせて。

くわいけんぐつとつ、こめばわつと一とこ
ろ七てん八とう おどろくおきのるまさを
かが。ぎよう(上)てんながら一だいじと。わか
ぎみいだきわがへやへ おしやりまいらせ
とぐちにつきそひまもりゐる。 汚ヤアなに
をざわ。ざわ。さわぐことはないわいの。

かたじけなくも。よりともこうよりくだされしこのをり。ふみわりしはかみへのぶれい。ちいさいがきでも。そのまゝにはさーおかれぬ。それゆゑにてにかけたは。おいへのおためをおもふ。やーほがちうせつ。ムヽ。ハヽ。ハヽヽヽ。ヲヽかあいそふに。キメ〳〵。

いたいかいのふ。〳〵。タヌたにんのわーさへなみだがこぼれる。コレまさをかどの。げんざいのそなたのこ。かなーうも。ないかいキメの。なんのマア。おかみへたいーてりよぐわいせーせんまつ。ごせいばいは。おいへのため。ムヽ。スリヤこれでもこなたいなんとも

ないか。ャ。これでもか。〳〵と。なぶりごろーにせんまつが。くるしむ　ころのきもきき、へこたゆる。つらさむねんさを。じつとこらゆる　しんぼうはたゞわかぎみがだいじぞと。なみだ一ってき　めにもたぬ。をとこまさりのまさをかがちうぎは、せんだい　まつだいまで　またあるまじきれつぢよのかゞみ　いまにそのなはかんばしき　さかえはしゞゆうまさをかゞーそぶりにきをつけ一うちほゝゑみ　でかしたやしほ。うだいしやうよりつるきよへくださるゝたいせつのおんくわし。こせ

がれめがでしやばつて。すつてのことにだいじのたくみ。アイヤ。アノ　だいじのくわーをあらーたとが。ころーたはやーほがはたらき。さすがわたらゑぎんべいがつまほどある。まさをかにはみづからがいひきかすことともある。おきのゑ。やーほりやうにんは。しばらくつぎへまをへだてて。ころん（カヽリ）りよめされど。さかえがことば。なんとゑへんもおきのゑが。ふかきころはわだづみのーほのやーほもうちつれて　ともなひとまへいりにける。あとさきみまはーさかえごぜん　まさをかがそばに

すりよりて（イロ）（ね）汐としごろしこみ～そなたの
ぐわんまう。じやうじゆ～て　さぞよろこ
び。エ、。なんとおつ～やる。ア、イヤ。モかく
すにはおよばぬ。とうざいわかぬうちより
も。とりかへおきゝそなたのこのつるきよ
がみにつゝがなふ。よしつなのまことのせ
がれ。せんまつがこのさいご。さぞほんま
うで、あろふ（キメ）のふ。エ、ヲ、とりかへごのや
うすはさきだつてゝれたれども。もゝやと
おもひさいぜんからうかゞふてみるところ。
　ちすぢのこのくるゝみを。なんぼきづよ
いおや～でも。モこらへらるゝものじや

ない。わかとのにしておくわがこがだいじ。
そなたのがんしよくかはらぬは。とりか
へごにさうゐはない。スリャみなおゝろはど
うふくちう。ぎやうぶどのともないだんし。
しよじわがつまのさしづあらん。まづこ
んにちはたちかへり。びやうきのやうすま
うしあげん。が。かならず〳〵なにごと
も。ひとにさとられまいぞやと。一とり
のみこみゆう〳〵と やかたをさして か
へらるゝ。あとには一とりまさをか
がおくくちうかがい。〳〵て。わがこ
のしがいいだきあげこたへ〳〵しかな

しさを。一どに わつとためなみだせきいり せきあげ なげきしが。コレせんまつようしんでくれた。でかしたな〳〵〳〵。そなたがいのちすてたゆゑ。じやちぶかいさかえごぜん。とりかへごと おもひちがへ。おのれがたくみをうちあけしは。

おやこのものがちうしんを。かみやほとけもあはれみて。つるきよぎみのごぶうんをまもらせたまふか。ハ。ハ。ハヽありがたや〳〵。〳〵な。これといふのもこのはゝが。つねぐ〳〵をしへてをいたこと。をさなごゝろにきゝわけて。てづめになつた

どくがいを。ようこゝろみてたもつたのふ。
ヲヽでかしやつた。〳〵〳〵よなふ。
そなたのいのちはでばおうしゆう。五十
四ぐんの一っかちう。しよぞんのほそをか
ためさす。まことにくにの。いしず
ゑぞや。とはいふものゝかあいやなァきの
みのおんたためかねてより　かくごはきはめ
ていながらも。せめてひとらしいもののて
にかゝつてもしすることか。　すじやういや
しいぎんべいがにようぼうづれのやいば
にかゝり。なぶりごろしをげんざいにそば
にみてゐるはゝがきは　どのやうにあろふ

どうあろふ。　四間合　おもひまわせばこのほ
どから。うたふたうたにせんまつが　七
つ八つから　かなやまへ　㊥　一ねんまてど
も　――まだみえぬ。　四合　一ねんまてど
もまだみへぬと　うたのなかなるせんまつ
は。　まつかひあつてちゝはゝにかほをば
みせることもあろ　おなじなのつくせんま
つのそなたは百ねんまつたとて千ねん万ね
んまつたとて　なん　説経　サシ、ケ、ン――のたよりが
――ア、、、あろぞ――いの　四合　三千せかいにこを
もつた　おやのこゝろはみなひとつ　こ
のかあいさにどくなものくうなといふてし

かるのに。どくとみえたらこゝろみてしん
でくれいといふやうな。（ヤ）だうよくひだう
なはゝおやがまたとひとり あるものか。
ぶしのたねにうまれたは（ヤ）くわほうかいん
ぐわか。いじ――らし、やしぬ
るをちうぎといふことはいつのよからのな

らはしぞとこりかたまりしてつせきしん
さすがをんなのぐにかへりひとめなけ
ればふしまろびしがいにひつしといだきつ
き ぜんごふかくに なげきーは ことと
わりすぎてだうりなり

義太夫獨習新書貳の卷終

大正九年三月廿五日印刷
大正九年三月卅一日發行

版權所有

大阪文樂社義太夫研究會編纂

著作兼發行者
大阪市東區船越町二丁目六十一番地
合資會社 大阪文樂社
代表社員 松原助四郎

印刷者
廣島市天神町十七番地
二宮齋美

發行所
大阪市東區船越町二丁目六十一番地
合資會社 大阪文樂社
電話南二一九八番
振替大阪三五二一一番

大連文藝協會會則

大連文藝協會會則終

大連文藝協會事務所

大連市東通二丁目六十一番地

印刷者　二宮榮美

大連市大和町十丁目番地

發行者　大連文藝協會

大連市東通二丁目六十一番地

印刷所　滿鐵印刷所

大連文藝協會事務所

大連市東通二丁目六十一番地